

CROI 2017 参加報告

国立病院機構大阪医療センター薬剤部

矢倉 裕輝

エイズ予防財団の派遣事業により、2017年2月13日～16日にアメリカ合衆国ワシントン州シアトルコンベンションセンターにて開催されたCROI 2017に参加、ポスター発表を行った。普段は自施設でHIVの外来診療において服薬支援を行っていることから、戻ってすぐに活用できるような発表に関する報告が主となるが、口頭、ポスター発表の中で特に印象に残った発表について報告する。

1 新薬の開発状況について

新規作用機序の薬剤であるカプシドインヒビターから、既存の作用機序であるが薬剤耐性のプロファイルが異なる核酸系および非核酸系の逆転写酵素阻害剤、プロテアーゼ阻害剤等の新規化合物に関する発表があった。近年、毎年のように新薬が発売されているものの、交叉耐性を示すものや既存の薬剤の合剤の発売が多い。そのため、新規作用機序、耐性プロファイルの異なる薬剤の登場は、薬剤耐性を獲得している症例に対する薬剤の選択肢が増えるものであり、早期の登場が期待される。

2 参考となった研究発表

近年最も頻用されている薬剤の一つであるドルテグラビル錠を粉砕の上、投与した際の薬物動態試験の結果が発表されており、錠剤投与時との同等性が示されていた。現在本邦で販売されている抗HIV薬はそのほとんどが錠剤もしくはカプセル剤であることから、他疾患や病態の変化等により、薬剤を元剤型のまま投与ができなくなった際の有効性を担保する貴重な報告であると考えられた。

また、近年発売されたブースターであるコビススタットに関する発表で、従来からブースターとして使用されているリトナビルと比較して、ダルナビルの薬物動態への影響については同等であったが、ドルテグラビルについてはコビススタット併用の方がより、ドルテグラビル濃度が高くなることが報告されていた。そのため、リトナビルからコビススタットに変更時は相互作用発現の可能性がある薬剤を併用している場合、併用薬の薬効に変化を来す可能性について注意喚起を行う必要があることが示唆された。

3 会議の成果

“EFFECT OF DOLUTEGRAVIR PLASMA CONCENTRATION ON CENTRAL NERVOUS SYSTEM SIDE EFFECTS”のタイトルでポスター発表を行った。本発表は血中濃度が高い症例ほど、中枢性の神経症状の発現率が高くなるというものであったが、血中濃度が高くなる要因に関する質問や、併用薬による発現頻度の違いに関する質問等を受けた。日本は臨床現場において、抗 HIV 薬の血中濃度を測定できる数少ない国の一つであることから、引き続き薬物動態学的観点からアプローチを行っていく重要性について再認識することができた。

以上、自身が自施設で関わっている日常診療に活用できる発表を中心に報告を行ったが、学会全体を通して、予防に関する報告や高齢化、長期予後を見据えた負担の少ない維持療法に関する報告が多かった。そのため、最新の研究に関する知見に加え、今後日本の HIV 診療が直面するであろう問題に関する研究報告の情報収集ができたため、非常に有意義な学会参加であった。

